Online edition ISSN 2187-7629 / Print edition: ISSN 2187-7610

漆胡瓶+仏女新聞

正倉院展 2016 特別号　飯島可琳

漆胡瓶が水鳥をかたどっていると聞いて、ほとんどの人がなるほどと思うことだろう。注ぎ口は丸く短いくちばしを思わせるし、美しくふっくらとした胴部は水鳥の身体を思わせる。長い首は真っ直ぐのように見えて少し傾いている。しきりに首をかしげる鳥の仕草のようでもある。こうなると把手(とって)でさえ尾羽に見えてくる。このようにして「水鳥のような水瓶」のイメージが頭の中に出来上がっていく。宝物としてみると生真面目で非の打ち所がないのだが、鳥としてみるとどことなくユーモラスである。漆胡瓶に親しみを感じるとすればそのせいだろうか。

水鳥をかたどっていると言っても、漆胡瓶の鳥らしいところは水瓶としてのフォルムだけだ。

表面に散りばめられるのは羽毛ではなくて、端正な文様である。銀板を切り抜いて作る草花や鹿などの形が貼り付けられている。銀平脱技法というのだそうだ。非常に小さいが極めて精巧に作られた模様は絵巻物の世界にも似ている。

漆胡瓶の緻密な模様を眺め続けていると、文様が水瓶の底に沈んでいくような錯覚を覚えた。不思議な感覚だ。たとえるとすれば、川面から川床を見るような感じだ。漆胡瓶は一つの物体だが、水瓶のフォルムという存在とは別に、水瓶の表面に配置された文様という存在がある。二つの存在が空間に結ぶ実像が漆胡瓶であるといったらいいのだろうか。

ぜひ正倉院展会場で確かめてほしい。

第 68 回 正倉院展　奈良国立博物館

10 月 22 日(土)～11 月 7 日(月)